

ロスとの対話

安藤晃二

去る四月、ロスに長く住む長男が一時帰国をした。「オータニ」を知らないと言う。広告代理店勤務の職業人の話かと首を傾げる。

一九九五年のこと、私は仕事でコロラド州コロラドスプリングスに居た。日本のあるアルミ鑄造メーカーのドア制御製品の輸出部門を代表して、この分野では米国随一の同業「社との販売提携交渉のため、この地を訪れた。昼食に招かれ、ステーキはコーンフェッド（トウモロコシのみの餌で育った牛の肉）の締まった赤身、「神戸ビーフも良いが、これも悪くないだろう」と「社の副社長の「お国自慢」。突然、「Hey men, Nomo, (ノーモウ) the Rookie of the Year, can you believe it?」ディプロマシーの側面もあるが、これぞ、と思えば、あっという間に出来る上がる、凄い人間を尊敬して止まないアメリカ的コンセンサスが正直な感動と共にぶつけられた。同席の全員が破顔、テーブルが明るい。その翌年、野茂投手はノーヒットノーランを実現してみせるのだ。

これより数年前、私は商社会社の鉄鋼部門から、堺にある製鉄会社の工場を繁く訪れた。相方が野球部長でもあり、その工場の総務部に、既に有名人であった野茂選手の在籍を記憶している。あの野茂が全米の絶賛を浴びている。ドジャースに始まり、MLBでの多くのチームでの野茂の活躍は胸を躍らせるものがあった。

つらつら思う。野茂の最大の功績は、イチロー他、その後連綿と続いた、日本から上陸したMLB選手群の歴史の魁としてけん引力となった事であろう。その系譜の中、大活躍を演じる大ヒーローとして、ドジャース入団を控えた大谷選手の姿を見ると、実に感慨深いものを感じるのである。

最近、ロスの息子からメールで、今やドジャースファンであると言う。大谷選手の七億ドルの契約のショックか。ゴジラ映画と宮崎駿のアニメがアメリカの映画館の興行収入のトップだとか。スーパーで寿司が売られ、日本のカルチャーがアメリカのメインストリームに食い込んでいる、まことに結構なことだ。

(2023・12・14 802字)